負の惨劇

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負の惨劇

【Ｎコード】

Ｎ７２６９Ｚ

【作者名】

ｋａｉ

【あらすじ】

ある日、ここ箱庭学園に転校して来た黒田暗示（くろだあんじ）。暗示は学園長に呼び出されてある依頼をされる・・・

ハジマリ（前書き）

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは。どうもｋａｉです。興味本位で書いてみました。少し短いですがご了承ください

ハジマリ

主人公になれるのかどうか分からない人
黒田暗示（くろだあんじ）
今までの人生で人と話した事がないくらーいやつ

暗示ｓｉｄｅ

ようし・・・どう自分を紹介するのか分からないんでここは少年漫画みたいな感じで紹介するか
よっ、オレの名前は黒田暗示だ。ひょんな事からここ箱庭学園に入学することになった。
それにしてもよく入れたな〜オレは学力全然ないのに受かったからな〜まあいいやオレは今度こそ友達を作るぞ！！
とまあこんな感じかな？自己紹介も終わったし、じゃあ行くか
ちなみにオレのクラスは１年マイナス１３組だ。
オレは、まず学園長さんにアイサツしに行った
なぜ学園長の所に行くかって？
それはね、オレにも分からないさ
まあ、とりあえず部屋の前に来た
オレは、周りに誰もいないことを確認するとドアをノックし

「失礼します」

そう言って中に入ってみると
不知火袴（しらぬいはかま）と安心院（あんしんいん）さんがいた
え？何で知ってるかって？

それはね、オレのスキル　異世界知（パラレルズノウ）というのがあってね
オレは、別の世界に行くことができて知らない人の情報をデータとして脳に記憶してるんだよ

「そこに座ってください」

オレは、イスに座って笑顔で言った

「何だよ老人二人がオレに用って」

「おいおい老人とは言ってくれるね～」

安心院さんがうすら笑いを浮かべて言った
いつ見ても何考えてるのか分からない人だ
その時、袴がオレにこう言った

「君を呼んだのは他でもありません・・・黒神めだかを生徒会長の座から引きずり下ろして欲しいのです」

企画

何考えているんだ、このジジイは

「つまりオレを、悪役にしたい訳か・・・」

「そういうことです」

「え～オレ絶対負けますよ」

「何言ってるんだよ、君の異世界知（パラレルズノウ）があれば相手の弱点なんて簡単に分かるだろ」

「いや～このスキルは、情報を手に入れる力で戦闘向きじゃないんですよ」

「大丈夫、君は他にもスキルを所持しているということは知ってるから」

「な・・・何の事ですか～？」

「しらばっくれるなよ、君のことは学園長から全て聞いてる」

隠しても無駄みたいだな

「はいはい、分かりました」

「では、教室に戻ってください」

オレは、笑顔でこう言った

「はーい、あっ、それと部屋に生徒入れるのやめてくれませんか？
さっきからうっとうしくて仕方なかったんです」

オレは、そう言うと部屋から出ていった

袴ｓｉｄｅ

あの少年・・・気づいていましたか・・・
まあこれは、予想の範囲内のことです
もしも、これが分からないのであれば、彼はめだかさんに本当に勝てないでしょう

「不知火君、本当に彼でいいんだね？」

「はい、彼ならやり遂げられるでしょう」

「毎度思うんだが、その自信はどこから沸いてくるんだね？」

「それは、年寄りの感です」

「そうか」

安心院さんは微笑みを浮かべながらおっしゃいました

暗示side

オレは今、どこにいると思う？
そう！オレは今、教室の前にいる
とうとうこの時が来たぜ
ヤ・・・ヤバいよこれ、緊張してきた！
な～んてね、そんなお約束なパターンはもうとっくの昔にやっている
オレは、勢いよくドアを開け

「おはよう皆さん、転校して来た黒田暗示だよ、よろしくね！！」

その瞬間、釘バットがオレの頭上から振り下ろされた
オレは、一歩後ろに戻り、避けた

「おいおい、健全な高校生に危ない物向けるなよ」

「なっなぜ避けられた？」

「オレは、前に一度、お前の釘バットで殴られてるから知ってるんだよ」

「何言ってるんだ？お前とは、初対面のはずだが・・・」

「オレの、異世界知（パラレルズノウ）で別の世界でお前と会ってるんだよ」

「くっ！」

ここは、おもしろいそうなヤツらがいっぱいだな
ここでなら、いっぱい友達が出来るぞ～

トモダチ

イエーイ！！
え？なんでそんなにテンション高いかって？
それはね、オレに新しい友達が出来そうだから
しかも、さっきオレを撲殺しようとした彼だぜ！！
何で仲良くなったかって？
回想シーン入りまーす

「お前俺のこと前に会ったって言ったよな～？」

「ああ、そうだけど」

「だったら俺のスキルも分かるよな～？」

「そうだね」

「行くぜ、攻撃軍（アタッキングフォース）！！！」

そう言うと釘バット君はすごい速さでオレを殴ってきた

「イタタッ」

「どうだ！これが俺のスキル攻撃軍（アタッキングフォース）だ！！」

「ああ、何度もくらってるよ。確か・・・自分の攻撃を瞬間的に速くする・・・だっけ？」

オレは、にこやかに言った

「な・・・何で笑っていられる」

「そのスキルはもう攻略済みだよ」

「ち・・・ちくしょう」

「なあ、何でオレを襲ったんだ？何もしてないのに」

「ああ？簡単だよ、転校生が来るって聞いたからうさばらしに一回殺しておこうと思ったからだよ」

動機・・・不純だな！！

まあいいや、とにかくオレの友達になってもらおう

「なあなあ、オレの友達にならない？」

「え？」

「オレ、友達1人もいないから」

「何で、友達がいないんだよ」

オレは、友達がいない理由を全て教えた

全て話し終えて釘バット君の顔を見ると鼻水たらしながら泣いていた

オレは、動揺した
おいおい！これは、異世界知（パラレルズノウ）では体験してないぞ！！
あの勇ましい顔はどこにいったんだ！！

「俺は、その話を聞いて感動したぞ！」

「お・・・おお！ありがとう」

「分かった、友達になってやる」

「え、なってくれるの！？」

「ああ、同じマイナス同士仲良くしようぜ」

「やったーーー！！」

と言う感じで今にいたるわけだよ

「ところでお前の名前は？」

「俺の名前は不正怜次（ふせいれいじ）だ、お前は？」

「オレの名前は黒田暗示だ」

「ところで暗示、お前の好きなマンガ雑誌はなんだ？」

「もちろん男は黙って週刊少年ジャンプだろ」

「そうかそうか！！お前もジャンプ派か！！」

とまあ、オレの一日は終了していった

安心院ｓｉｄｅ

僕は今、廊下の天井を歩いている
そして、僕は色々と考え事をしていた
あの暗示という生徒が気になっていた
う～んこれは恋の悩みかな？
な～んてねあんな若造に恋愛なんてするわけがない
それに恋愛なんて、そんなくだらねぇーカスみたいな感情とうの昔に捨ててやった
さてと、しばらく様子を見させてもらうよ

・・・黒田暗示君

宣戦布告

ふぁ～あ
おはよう、みなさん！！
今、オレは自分の家にいる
全くいや～な天気だぜ（ちなみに今、晴れである）
え？普通いい天気だろだって？
そうかな～？オレにとっては嫌な天気だけどな
まあ、とりあえず学校の準備をするか

～１０分後～

よし！準備完了！！
では、学校にレッツゴー！！
オレは、何気なくいつもと同じ道を歩いていた
その時、曲がり角で誰かとぶつかった
おっ！これはラブコメで定番のパターンでは・・・ということは女の子？
そこにいたのは・・・
善吉だったーーーー！！

「おっ！悪い！！怪我はないか？」

うん・・・別の意味で怪我をしたよ

「大丈夫だよ」

「そうか、良かった」

「じゃあ、オレは行くから」

「あっ、ちょっと待て！」

「何だよ」

「お前名前は？」

「黒田暗示だ」

「俺の名前は、人吉善吉(ひとよしぜんきち)だ」

知ってるよ

「ぶつかって悪かったな、今度、何かおごらせてくれよ」

「いや・・・別にそんなつもりじゃ・・・」

「まあ、そう言うなよ、じゃあな！！」

善吉はそう言うと、どっかに行ってしまった

「あっちは、学校とは真反対の道だぞ」

オレは、そう呟くと鼻歌を歌いながら学校に行った

学校に着くと今日のことを怜次に話した

「まじかよ、生徒会の奴と会ったのか！」

「ああ」

「俺は、あいつらが嫌いだ！」

「何で？」

「俺達の球磨川（くまがわ）先輩を生徒会に引き入れたからだよ！！」

「ああ、そういうことね」

そういえば、黒神めだかにアイサツをするのを忘れてた
せっかく転校して来たんだからな
じゃあ、行くか！

「悪いな怜次、急用ができた」

「何だよ急用って」

「ちょっと、アイサツ周りに行く」

「おう、分かった」

善吉ｓｉｄｅ

俺は、いつもと変わらず庶務の仕事をこなしながら、平穏な毎日を送っている
しかし、なぜか今日だけはいつもと違う感じがする
めだかちゃんにいたっては、いつもと変わらず生徒会長の仕事をしている

阿久根(あくね)先輩と喜界島(きかいじま)も変わらず仕事をしていた
球磨川も、いつもの通りニヤニヤ笑いながらジャンプを読んでいた
気のせいかと思って仕事に戻ろうとしたとき

「おっはよーございます！！」

いきなりデカイ声が聞こえてきた
何だ！？と思い声のする方を見た
そこには、黒田がいた

「え、黒田？何でお前がここに？」

「ヤッホー、善吉君久しぶりだね～」

「いや、朝会ったばっかだろ」

「何だ善吉、知り合いか？」

「あ・・・うん、朝忘れ物して走って取りに戻ろうとしたときぶつかった時に会ったんだよ」

「ていうかお前、ここの生徒なのか！？」

「そうだよ～ちなみに学年は一年マイナス十三組だよ」

「「「！！」」」

『やったーぼくに、新しい後輩ができた～！！』

「そうですね、球磨川先輩」

『あれ？なんでぼくの名前を知ってるの？』

「それは、秘密です」

「ところで何でお前がここにいるんだ？」

「ん？ああ、それはね、黒神めだかを生徒会長の座から引きずり落とすためだよ」

「「「！？」」」

「あ！口がすべった」

「大丈夫だよ、今日はアイサツだけだし」

何だこいつ？言ってる事が球磨川並だぞ！！

その時、めだかちゃんが

「おもしろい！！いつでも勝負を受けてやる！！」

「ありがとう！じゃ、オレは教室に戻るんで」

「おお！待っているぞ！！」

黒田は、みんなに一礼して帰って行った

暗示ｓｉｄｅ

ふ～緊張した～

「いや～良かったよ暗示君！！」

天井から安心院さんがぶら下がっていきなり言ってきた

「安心院さん・・・」

「ぼくは、君を見直したよ。生徒会全員に大胆発言！」

「いや・・・あれは、口がすべっただけですよ」

「そうかい？でも良かったよ、球磨川君以来の発言だよ」

「そうですか？」

「そうだよ！」

「ありがとうございます」

「ところで暗示君」

「はい」

「一つ聞きたいことがあるんだが」

「なんでしょう？」

「君・・・本当にマイナス？」

宣戦布告（後書き）

かなりがんばりました！！

お話

「え、今なんて？」

「君は本当にマイナスなのかい？」

「それって一体どういうことですか？」

「僕は、ずーと君を見ていた、そして、気づいた」

「何に？」

「君の過不荷だよ」

「え？」

「普通マイナスな生徒は、いつも勝つことに憧れている」

「しかし、オレの場合は勝つことに憧れがない、でしょう？」

「そう！君の過負荷、異世界知（パラレルズノウ）がいい証拠だ」

「・・・」

「あのスキルは、どう見てもアブノーマル向きだ」

「・・・」

「そして、聞くが、何で君はこの学校に来たんだい？」

「う～ん、親の都合ですかね」

「本当にそうかい？」

「そうですよ」

安心院さんは、光のない目でオレを見てきた
まるでオレの心を見透かしているようだった
そして、安心院さんはこう言った

「まっいいや！」

「今の話を聞いてみると君は、マイナスじゃないということが判断できたよ」

「！」

「じゃあ、僕は帰るね」

「ちょっと待ってくれ！！」

「何だよ～僕は、速く帰ってジャンプを読まなきゃいけないんだぜ」

「聞かなきゃいけないことがある」

「何だい？言ってみな」

「オレは、何者なんだ？」

「う～ん、言われてみればそうだったね」

「でも、そういうことは自分で分かろうと努力するんだよ」

「じゃあ、がんばってね～」

安心院さんはどっかの青春マンガみたいな台詞を吐いた
安心院さんの答えがあまりにも期待はずれだった
その時、安心院さんが

「ああ、そうそう知ってるかい？」

「何ですか？」

「・・・新しいクラスが作られるらしいぜ・・・」

「え！マイナスの次にどんなクラスができるんですか？」

「おっと！ここから先は言えないぜ」

なら話すなよ！！
オレは、心から思った

「何でですか？」

「ここで話したらおもしろくないだろ」

「そんな～」

「まっ、がんばって」

そう言うと安心院さんは、去っていった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7269z/

負の惨劇

2011年12月26日00時53分発行